



野沢 慎司教授 (専攻 家族社会学、社会的ネットワーク論)



(1) 社会学とはどのような学問とお考えですか。

社会学とは何なのか。この問いに簡単に答えることは至難の業です。結局のところ、人を煙に巻くようなわかりにくい文章にならざるをえません。社会学の世界は、絶え間ない領土の拡張を繰り返し、至る所に支流や淀みが形成されているうえ、他の知的世界の営みとも連続しているためだ、と言いつけておきましょう。

しかし、なぜ社会学をやるのかといわれれば、おもしろいからという点に尽きます。社会学研究を飯の種にするのでない限り、社会学が直接役に立つと思えることは少ないかもしれません。社会学を専攻すると就職に有利な「一般常識」を身につけられると思いきや、そう考えてしまうと社会学の本当のおもしろさに出会えなくなってしまう心配があります。もちろん社会学の世界にも「常識」はあるし(それは常に塗り替えられる運命にあるのですが)、また社会に関する常識の形成の一翼を社会学者が担っていることも否定できません。にもかかわらず、学生の皆さんが社会学をやる意味があるとすると、それはむしろ私たちが常識ではとても理解できないと思える社会現象や、あまりに常識的で「自然な」ことなのでことさら理解する必要もないと思える社会の断面に疑問を差し挟み、独自の仕方理解可能にする「おもしろさ」を体験する点にあります。別な言い方をすると、社会学のおもしろさは、社会の「常識」のなかにいつのまにか織り込まれてしまっている自分の視点を社会的現実の外側に移動させて眺めるような、

少々斜に構えた皮肉っぽさと関連しているのです。少し社会学を学んでいくと、なぜそんなことが起こるのか簡単には答えの出ない問題がいかに多いか、つまり社会がいかに多くの謎に満ちた「おもしろい」世界であるかに気づくことでしょう。

ただし、どんな視点を、あるいはどんな社会現象をおもしろいと感じるかには個人差があります。だから、自分にとっておもしろい社会学を探すことが大切です。それを発見するための入り口は無数にあります（例えばこの後で紹介する本）。そして、さらにしばらく社会学の世界に浸ってみると、自分というものがずいぶんと違って見えてくることになるはず。意外にも、社会学は自分の真の姿を見るためのマジック・ミラーなのかもしれません。

その意味では、自分の人生（遭遇する出来事や出会う人々）こそが「社会学する」ためのもっとも重要なフィールド（現場）だと言えます。そう考えてくると、逆説的ですが、社会学ほど生きていく上で役に立つ学問はないと言えるかもしれません。実際、自分について見えてきたことをさらに展開してみると、自分以外の人にも共通する痛みや悩みが可視化できるかもしれません。その苦悩を生み出しているメカニズムを説明し、それを取り除くために社会の仕組みを変えることにもつながるかもしれません。結果として、社会の見えないところで苦しむ人たちにとって役立つこともあるのです。

さあ、まずはひとつつつ入り口を見つけて、この鏡の国への冒険に乗り出しましょう！

（2）先生が専攻されている、あるいは、この大学で学生に教えられている社会学とはどのような学問ですか。

家族という現象を、社会的ネットワークという観点から分析していくことのおもしろさから研究を始めました。家族のなかの人間関係は、それだけを取り出して研究されがちですが、家族のかたちは、それととりまく近隣や職場の人間関係や親族・友人関係のありようと相互浸

透しています。人間関係のネットワーク構造に着目してみると、戦後の高度経済成長、都市化などの社会変動と家族やコミュニティの変容との関連が見えてきます。

最近では、日本で初めてのステップファミリー（親の新しいパートナーとの関係を持つ子どもがいる家族）の研究に携わり、そのパートナー関係、親子関係、継親子関係、別居している親子の関係、元配偶者との関係、およびそれを取り巻く多様で複雑な親族・非親族の関係ネットワークに眼を向けることが、現代における「家族」のあり方を再考することにつながると考えています。21世紀を迎えた現在、私たちの人生は、離婚や再婚の増加をはじめとして、20世紀後半に一般化した標準的コースとは異なる多様な道筋をたどる傾向を強めているからです。

さらに最近では、社会学部を起点として明治学院大学が推進している[「内なる国際化」プロジェクト](#)との関連で、国境を越えて移動する家族（その子どもたち）の経験についても関心を払っています。グローバル化とともに変容する家族も重要なテーマとなってきています。

(3) 1～2年次で読んで欲しい本

1. 『[知的創造の条件－AI的思考を超えるヒント](#)』（吉見俊哉 筑摩書房 2020）

私とほぼ同世代の社会学者である著者が、自らの知的創造のルーツ（演劇青年だった学生時代）を語り、研究の世代的特性を考察し、社会学の教員としてゼミ生たちとの学びの舞台裏（教師を徹底的に批判させる知的バトル）を紹介する。さらにはネットとAIが社会を変えつつある現状において、大学で研究することの意味を掘り下げる。現代社会の先端的变化を取り上げながら、以外に知的創造の価値や方法の意味に辿り着く。批判的読書法など、共通の基本的視点をストレートに説明してくれる入門書としては、約四半世紀前に書かれ、私のゼミに入る前の必読書として推

奨してきた『[知的複眼思考法](#)』（荻谷剛彦 1996 講談社 [講談社+α文庫 2002]）がある。

2. 『[情報生産者になる](#)』（上野千鶴子 ちくま新書 2018）

4年生で書く卒論（研究）というものは、どのようなものであって、自分が挑めそうなものなのか、学生の多くは見当がつかずに逡巡する。推薦される論文の書き方や調査法のテキストはあまたあるが、本書は著者特有の刺激性・挑発性ある文体で、専門用語もしゃきっとかみ砕いて、研究という営みの全体像を鮮明に提示する超入門テキストとして一読の価値がある。研究の枠を超えてあらゆるタイプの著書を出版し続け、多様な大学で教えてきた著者が、社会学の論文完成までに必要な知識と方法と心得を頭にたたき込んでくれる。新書としては分厚いが、教科書としては読み通しやすく、携帯しやすい。実際にやってみると論文作成は簡単ではないが、できそうな気持ちにさせてくれる。これが大事だ。

3. 『公園デビューー母たちのオキテ』（本山ちさと 1998 DHC [学陽文庫 1998]）

なんだかやれそうな気持ちになったら、読みやすい事例に触れることが大事だ。本書は、著者が自らの「公園デビュー」体験を綴ったエッセイであって研究ではない。しかし著者は、あたかも参与観察を実践している社会調査者のように、自らの日常的体験を客観的に眺め、疑問を発見し、考察を加えていく。そのやり方はきわめて社会的である。自分の幼い子どもを連れて近所の公園に出かけた著者は母親同士の小集団（ハハ族）に遭遇する。公園に通うようになり、次第にこの「ハハ族」の一員となっていくと、その集団の内部にはつきあい方の「オキテ」（社会学の用語で言えば「規範」）があり、メンバー間にも「序列」があることに気づいてゆく。他の母親グループや外国人、孫を連れてたおばあちゃん、ホームレスの人たちがその公園に出現したときにハハ族がど

のような反応を示すのかが観察され、異質な人との接触が回避される様子が描かれる。社会学者でも人類学者でもない著者が、自らの体験と思考を客観的に綴ったこの本は、社会学的思考とフィールドワークのおもしろさ（つまり自分の経験を相対化するおもしろさ）が私たちのすぐそばにあることを教えてくれる。絶版になってしまったが、今でも学生諸君に読んでほしい本である（一世代前の育児環境を知る意味でも）。

4. 『[いじめの構造－なぜ人が怪物になるのか](#)』（内藤朝雄 講談社現代新書 2009）

繰り返しマスメディアを賑わす、いじめによる子どもの自殺事件。いじめ問題に対する識者の常識的な原因論と処方箋－秩序が失われた学校に秩序を取り戻し、道徳観念が失われた子どもたちに人間関係の大切さなどの道徳観念を注入すればよいなど－は的外れであると著者は論じる。著者の考えにしたがえば、生徒たちの間にベタベタした人間関係が生じ、「ノリは神聖にしておかすべからず」という強力な道徳的秩序／規範が生成しやすい閉鎖的の学校空間こそがいじめの土壌となっている。神聖な学校という空間では、みんな仲よくしなければいけない。そのような「学校共同体主義イデオロギー」が暗黙の規範として支配する状況を、いじめの構造的要因と見る逆説的で脱常識的な著者の主張には社会学的な力がある。「学級制度廃止」という提案は一見非現実的に聞こえるが、私たちの思い込みを外して考えれば現実的な方策なのかもしれない。その考察は、私の専門とするネットワーク論の知見とも響き合う点が多く、学校以外の世界（家族、職場、そして上記の「公園のハハ族」の世界など）に生じる社会現象にも応用可能な構造的視点を含んでいる。

5. 『[日本人のしつけは衰退したか－「教育する家族」のゆくえ](#)』（広田照幸 講談社現代新書 1999）

青少年による凶悪犯罪や幼児虐待の事件が毎日のようにマスメディアにとりあげられるたびに、「昔の家庭（あるいは地域社会）はきちんとしたしつけを行っていた」のに、現代の「家庭の教育力は低下した」という常識的イメージを私たちは当然のように再確認する。しかし、教育社会学者である著者は、歴史的資料や古い社会調査データを引用しながらこの常識に挑戦する（そもそも少年による凶悪犯罪は本当に増えているかを疑う）。そして、むしろ「教育する家族」が社会全体に浸透し続けてきた近代日本の歴史を描き出す。その論理はきわめて社会学的だ。

6. 『土』（長塚節 新潮文庫ほか）

作者の長塚が32歳だった明治43年（1910年）に東京朝日新聞に連載された長編小説。茨城県の貧しい農家の家族・地域生活を淡々と描いた作品。冒頭で主人公・勘次の妻が病死し、残された娘と幼い息子の3人が生き延びるために悪戦苦闘していく日々を精緻に描写してゆく。親子関係、親族関係、小作人と地主との関係などが織りなす日常生活には明るい側面がほとんどない。読み進めるのが楽しい作品ではないだろう。会話に出てくる、この時代の茨城弁を理解するのも難しいかもしれない（茨城県出身の私でもかなり苦労する）。現代の大学生が、文章から情景を思い浮かべるのも難しいかもしれない。

しかし、当時の人口の大多数を占める貧しい庶民（農民）の家族生活、家族関係の具体的イメージをつかむ上ではやはり実に貴重な歴史的資料であり、苦労して読む価値がある。この作品の世界を想像しにくいのも無理はない。当時、東京に暮らす知識人であった夏目漱石（新聞連載を推したのが彼だ）にとっても、この小説に描かれる農民の生活世界は想像を超えるものだったようだ。

当時の都市中間層と農民の間に大きな格差が存在したように、どの時代の家族にも多様性が存在するという事実を頭の片隅に

置きつつ読み進めれば、「昔の家族はよかった」という単純な神話を簡単に信じるようなナイーブな学生でいられなくなるだろう。そのための訓練としても、今この小説を読む（社会学的な）意味がある。

7. 『[希望が丘の人々](#)』（重松清 小学館 2009[講談社文庫 2011]）

長塚節『[土](#)』の100年後に書かれたこの小説を、それと並べて読んでみるとどうだろう。こちらも同じような年頃の娘と息子を残して母親が先立った後の父子家庭を描いている点が共通する。東京郊外のニュータウン（妻の出身地）に引っ越してきた父子3人が地域の人々と新たな関係を築いていくプロセスが描かれる（2016年に[ドラマ化](#)されたが未見）。しかし、そこに登場する親子関係、祖父母と孫の関係、さらには亡き妻に対する感情の描かれ方に着目すると、情緒性などの点で『土』との差異が際立っている。物質的な生活水準の違いは言うまでもない。たった2つの家族事例であり、しかもフィクションの中の家族だが、1世紀という時を隔てて「家族」の何が変わったのかを考察する糸口としては刺激的である。

この作品に限らず、現代の家族に社会学的な関心がある人にお薦めしたいのが重松清の小説である。重松清ほど、現代の多様な「家族」状況にこだわっている作家はいないだろう。例えば、『[定年ゴジラ](#)』（講談社文庫 2001）は、都心にある銀行を定年退職した主人公が、郊外ニュータウンの自宅近辺で毎日を過ごす生活に再適応しながら、「家族」と「コミュニティ」を再発見し、アイデンティティとネットワークを再生する物語。テレビ[ドラマ化](#)、漫画化もされた。彼の作品は、直木賞を取った短編集『[ビタミンF](#)』（新潮文庫 2003—これもテレビ[ドラマ化](#)された）や長編『[流星ワゴン](#)』（講談社文庫 2005—初版出版13年後の2015年になってテレビ[ドラマ化](#)された）など、現代の「ふつうの」父親たちが直面する抜き差しならない状況を描いたものが多い。思春期の子

どもたちの決して明るくはない日常世界（『[ナイフ](#)』新潮文庫 2000、『[エイジ](#)』新潮文庫 2004）、ニュータウンに住む若い母親が公園デビューすることによって巻き込まれていく人間関係の難しさ（『[送り火](#)』文春文庫 2011 所収の短編「漂流記」）など、哀しく苦しい状況を描きながら絶望させず、希望を与えながら甘くは終わらない無数の家族物語は、社会学的想像力を喚起するための良質な素材である。

私の研究テーマであるステップファミリーを扱った作品『[幼な子われらに生まれ](#)』（幻冬舎文庫 1999）は、執筆後 20 年以上を経た 2017 年に[映画化](#)（三島有紀子監督）されて話題を呼んだ。親の離婚・再婚を経験した子どもの心情、反応をリアルに描いた映画作品となっている。

8. 『[約束された場所で](#)』（村上春樹 文藝春秋 1998 [文春文庫 2001])

私たちの理解を超えた出来事として社会を騒然とさせた「オウム」も次第に人々の意識のなかに沈殿しかかっている。あの村上春樹が（元）信者たちに直接インタビューしてオウム現象の意味に迫ろうとする。そして、「あの人たちは『エリートにもかかわらず』という文脈においてではなく、逆にエリートだからこそ、すっとあっちに行っちゃったんじゃないか」と指摘する。同じ著者による「地下鉄サリン事件」の被害者へのインタビュー集『[アンダーグラウンド](#)』（講談社文庫 1999）とあわせて、現代日本社会を考察するための貴重な材料を提供している。

9. 『[「A」マスコミが報道しなかったオウムの素顔](#)』（森達也 角川文庫 2002）、『[A3](#)』（森達也 集英社インターナショナル 2010 [集英社文庫 2012])

『[A](#)』と『[A2](#)』は、映像作家でもある著者が監督したドキュメンタリー映画のタイトルである。森達也は、オウム真理教の内側

に、村上春樹よりもはるかに深く入り込み、荒木浩に焦点をあててその行動とメディアなどの反応をつぶさに追いかけた映画『A』を撮った（1998年公開）。その後、さらに続編の『A2』を撮った（2001年公開）。上記の本『「A」』は、映画『A』撮影の過程で著者が体験したこと、それを基にして考察したことの記録だ。

著者が次第にオウム事件とは何だったのかという問いに深くはまっていく過程、そしてそこから独自の視点をつかんでいく過程の記録だ。『A3』で著者は、オウム裁判のゆくえに深く関わりながら問いを発し続けることになる。膨大な時間とエネルギーをかけた映像作品（オウムの内側から社会を見た作品とも言えるだろう）と著作に目を通すと、これまでマスメディアというフィルターを通して私たちが情報処理して形作ってきた常識的解釈（正しい世界が悪い人々の集団によって危機に陥れられたが、それが適正に解決された）がまったく違って見えてくる。マスメディアが何をもたらしているのか、法律や裁判などの司法とそれを作り変える政治の制度がどのように運用されているのか、そしてそれらの相互依存構造が私たちの常識をどのように規定し、社会の変容に対して決定的な影響を及ぼしているのかといった、社会学の根本に関わる夥しい数の問いをこちらに突きつけてくる作品群である。

アジア太平洋戦争、東日本大震災と原発事故など、それ以前や以後に起きた大きな社会的事象にも同じことが言えるだろうと気づかせてくれる。そして最近になって、『[A4 または麻原・オウムへの新たな視点](#)』（森達也・深山織枝・早坂武禮 現代書館 2017）が出た。オウムから湧き出す問いは終わっていない。日本のマスメディアや裁判制度が内包している構造的問題（リスク）をさらに詳しく知って驚愕したい人には、烏賀陽弘道『[報道の脳死](#)』（新潮新書 2012）や瀬木比呂志『[絶望の裁判所](#)』（講談社現代新書 2014）をお薦めしたい。

10. 『[禅とオートバイ修理技術－価値の探究](#)』（ロバート・M・パーシグ ハヤカワ文庫 2008）

2013年度の研究サバティカル期間に5ヶ月ほど滞在したニュージーランドのオークランド大学心理学科でホスト教員となってくれた臨床心理学者でステップファミリー研究者のクレア・カートライト先生ご夫妻とカフェで会話していたときのことだ。文脈は思い出せないが、「禅（Zen）」という言葉が私が口にした。それに対してクレアの夫（引退した元歯科医）のリチャードが「“Zen”という言葉で思い出すのは Pirsig の *Zen and the Art of Motorcycle Maintenance* だな」と呟いた。それが1970年代中頃にアメリカで大ベストセラーとなった自伝的小説のタイトルだと知らなかった（出版に至るまでに121の出版社に出版を断られたという点でギネス記録を持つベストセラーらしい）。この本は日本ではさほど有名にはならなかったもので、知らないのは私ばかりではない。

なかなか気難しげなリチャードが、思いがけずクリスマスに原書ペーパーバック版をプレゼントしてくれた。少しずつ読み進めると、その独特の世界に惹きつけられた。主人公（=著者）が、11歳の息子を大型バイクの後部に乗せて米国中西部の荒々しい景色の中を延々と旅する物語と主人公の世界観、哲学をめぐる抽象的な議論が交互に展開する。それはいつの間にか、失われた記憶の回収と自己回復の旅へと変わり、大学とは何か、理系・文系の垣根を超えた知識・教養とは何かという問いを巡る神経的な闘いの場（その記憶）へと辿り着く。禅そのものが語られているわけではないが、オートバイのメンテ技術にも通じる《クオリティ》の追究に関する禅問答的な思考の世界が繰り広げられる（これは現在日本中の大学が血眼になっている「教育の質保証」における「質」のルーツなのかもしれない）。

大学が否応なく急激に変質しつつある現代日本の大学生、いや大学教員にこそ読まれるべき書かもしれない。（因みに、特別研

究期間中のクレアとリチャードが 2017 年の 8 月に明治学院大学に滞在してくれ、再会と研究交流の機会を得た。)

(4) 3～4年次で読んで欲しい本

1. 『須恵村の女たち－暮らしの民俗誌』(ロバート・J.スミス, エラ・ルーリィ・ウイスウェル 御茶の水書房 1988)

離婚・再婚と子どもの問題に取り組む中で、大学院時代に購入した(恩師の一人が翻訳した)この本を読み直して、私の研究テーマにとってこの本が大きな価値をもっていることに気づいた。これは 1935 から 36 年にかけて、人類学者で当時の夫・ジョン・エンブリーとともに来日したエラ・エンブリーが熊本県内の農村で行ったフィールドノートを後にロバート・スミスが編集・執筆しなおして 1982 年に出版した著作の翻訳である。

エラの観察に基づき、「須恵村の女たちは、結婚や離婚などで、予想のできないほどの著しい自立性を見せていた。彼女たちの多くは一度以上結婚していた。そして、びっくりすることには、女性の方が結婚生活に終止符を打つことは、その結婚が正式のものであれ、慣習法のものであれ、決して珍しいことではなかったということだ」(302 頁)という考察が導かれている。そして、この村での結婚・離婚・再婚が村内に複雑な家族関係・親族関係を作り上げ、子どもたちが多様な状況で育てられる事例が描かれている。

昔の日本で離婚や再婚が多いことを意外に思われるかもしれないが、この点は最近の歴史社会学的な研究の成果と符合している。例えば『[歴史人口学からみた結婚・離婚・再婚](#)』(黒須里美編 麗澤大学出版会 2012)を見ると、江戸時代の日本では離婚・再婚が現代よりも遙かに頻繁に起こっていたと推定されている。明治期以降の新たな民法の制定や新しい教育制度の効果によって、戦前期から戦後の高度成長期にかけて(戦後の混乱期は別として)

日本は離婚・再婚のきわめて少ない社会へと変貌したのだ（その後、現代にかけて再度大きく変化するのだが）。本書は、前近代から近代への過渡期にあった農村の家族に関する意外な事実を具体的に知るための貴重な歴史的資料である。その価値や背景を知るための新しい入門書『[忘れられた人類学者－エンブリー夫妻が見た〈日本の村〉](#)』（田中一彦 忘羊社 2017）も出版された。80年ほどをタイムスリップして、日本的近代家族の形成過程を体験するよい機会だ。

2. 『近代家族の形成』（エドワード・ショーター 昭和堂 1987）

上記の①に描かれている明治以降、戦前期に作られつつあった日本的な近代家族の形成を考える上で、近代化とともに西洋世界では「家族」にどのような変化が生じていたかを対比的に考えることは有意義だ。その点で役立つ1冊がこれだ。欧米の近代以前の歴史的資料に基づきながら、現代の私たちが「自然だ」と感じる家族のあり方（恋愛結婚や母性愛）は決して普遍的なものではなく、近代という時代の産物であることを明快に主張した問題提起の書。自分の家族観を相対化するために有益な社会史にして近代家族論の代表作である。これを読んだ上で、日本の近代家族の形成は、上記のように西洋社会のそれに強い影響を受けつつ、違ったかたちの変化として現れたことに目を向けてみよう。

3. 『[21世紀家族へ－家族の戦後体制の見かた・超えかた](#)』〔第4版〕（落合恵美子 有斐閣選書 2019年〔初版1994年〕）

日本の家族社会学研究に「近代家族論」を持ち込んだ著者が、わかりやすい語り口で、戦後日本の家族の変化を多面的に解説してくれる。何度も改訂されながら熟成を続けた評判のテキストだが、初版出版から四半世紀を経て出された第4版では最新の動向について新たな2つの章を書き加えた。核家族化、女性の社会進出、少子化、孤立育児などについて私たちは知っているつもりだ

が、それは勝手な思い込み(神話)であると気づかされるだろう。現代家族に関わる問いを立てようとしたら、まずは本書で自分の「常識」をチェックしてみるのがよいだろう。とくに著者が「家族の戦後体制」と呼ぶ家族の標準型が広く社会に定着した高度経済成長期に何が起きたかを確認しておきたい。

4. 『日本人の生き方－現代における成熟のドラマ』(デイビッド・プラス 岩波書店 1985)

高度経済成長期に家族を形成して中年期を迎えた、都市に暮らすふつうの日本人4人にインタビューし、そこから浮かび上がるアイデンティティの「成熟」の軌跡を、4つの小説のストーリーに重ね合わせて読み解いていくライフコース論。著名なアメリカの人類学者・日本研究者によるこの職人芸的作品は、理論と事例を結びつけるひとつの方法論的モデルを示してくれてもいる。この日本語訳の序文で「成熟に関する原子論や素粒子論と同時に電磁場理論も必要である」と述べる著者には、相互作用論のみならず、ネットワーク分析的な構造論の風味も感じられる。何らかのかたちで再版してほしい名著だ。

5. 『都市的体験－都市生活の社会心理学』(クロード・フィッシャー 未来社 1996)

都市的環境は、家族や親族の絆、友人や民族の絆、さらには心理的安寧にどんな影響を及ぼすのか。既存の理論と自らの「下位文化理論」を対置させ、夥しい経験的研究の成果に目配りしながらその優劣を検討していくかたちで書かれた都市社会学の教科書(原著第2版は1984年の出版)。理論的革新と実証的裏付けの双方を追究する研究姿勢に圧倒される。この本の主張の重要な論拠となっている同じ著者による北カリフォルニア調査の詳しい数量データ分析については、その後翻訳出版された『友人のあいだで暮らす－北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』(フ

イッシャー 未来社 2002) を参照。こちらは、原著が 1982 年の出版で、今やパーソナル・ネットワーク研究の古典と呼んでもよいだろう。

6. 『[ネットワーク分析－何が行為を決定するか](#)』(安田雪 新曜社 1997)

社会学のみならず人類学や心理学などの領域にまたがる「ネットワーク分析」の発想、方法論、研究成果をわかりやすく解説した入門書。人々の意識や行為に影響を与えている、見えない(人間関係の)構造を捉える道具としてのネットワーク、という視点は社会的に大きな発展可能性を秘めている。同じ著者による続編『[パーソナルネットワーク－人のつながりがもたらすもの](#)』(新曜社 2011) もある。

7. 『[離婚は家族を壊すか－20年後の子どもたちの証言](#)』(コンスタンス・アーロンズ バベル・プレス 2006)

著者は、アメリカで長く離婚・再婚研究に携わってきた社会学者・臨床家である。離婚家族を対象に行われた調査の 20 年後に、当時子どもだった対象者 173 人に再インタビューし、その大多数が成人後には親の離婚を肯定的に捉えていることを明らかにした研究の成果。親の離婚は子どもに長期的に深刻な影響を与えるという離婚の否定的な側面を強調する常識的イメージ(および先行研究)に対する実証的反論である。親の再婚後の家族(ステップファミリー)における子どもたちの経験についても詳しく取り上げられ、両親や継親との多様な関係史が描かれている。原著のタイトルは『私たちは今でも家族 ([We're Still Family](#))』であり、邦訳のタイトルにあるような「親の離婚によって家族は消滅する」という(現代日本に根強い)離婚家族観に対する強烈なアンチテーゼとなっている(この点、邦訳書名はミスリーディングだ)。離婚後の両親による子どもの共同監護を前提とする法制度が普及

したアメリカにおいて、離婚・再婚した両親は別居しているが、子どもは両親との関係を維持し続け、両親が親としての役割を果たし続けるネットワーク型家族として機能する可能性を支持している（核家族の核が分裂して2世帯になった「双核家族」という概念を著者は以前から提唱している）。日本社会の離婚後の家族をめぐる議論において、決定的に欠けている重要な視点を提示している。

8. 『[サードカルチャーキッズー多文化の間で生きる子どもたち](#)』

（デビッド・C．ポロック，ルース＝ヴァンリーケン スリー
エーネットワーク 2010）

「サードカルチャーキッズ(TCK)」とは、両親の生まれた国の文化（第一文化）でもなく、現在生活している国の文化（第二文化）でもなく、それらとはまた別の第三の文化に属する子どもたちを指している（その後成人して Adult になると ATCK と呼ばれる）。国境を越えて移動する家族の子どもたち、異なる故国を持つ両親の子どもたちが TCK にあたる。この子どもたち（その成人後）はどのような特性を持つかを論じているのだが、「第三の文化」に属すると主張する点に本書の独自性がある。これは何を意味しているのかをぜひ探してほしい。私たちの周りには TCK が珍しくなくなったが、周囲から TCK 的な存在とは理解されにくい。彼女／彼らを理解する入り口として読んでほしい。あなた自身が TCK かなと思うなら、もちろんすぐに読んでほしい。

(5) 先生の代表的な著書または論文を二つか三つ教えてください。

1.野沢慎司・菊地真理『[ステップファミリーー子どもから見た離婚・再婚](#)』角川新書 2021年

20年間にわたるステップファミリー共同研究（共著者の菊地さんは明治学院大学の社会学科／社会学研究科出身）の成果に基づき、

ステップファミリーは初婚核家族とどう違うのかをできるだけわかりやすく解説した。そして、ステップファミリーが困難に陥るのはどのような場合か、逆に子どもたちにとっても他の家族形態にはない豊かな経験をもたらす家族になるための条件は何かを探る。親の離婚・再婚を経験する子どもたちの利益に焦点を据えて、日本社会に蔓延する「常識」を可視化し、それを支えてきた法制度などの根本的な改革を提言している。

2. SAJ・野沢慎司編『[ステップファミリーのきほんをまなぶ－離婚・再婚と子どもたち](#)』金剛出版 2018年

2001年の設立当初より、SAJというステップファミリー支援団体と連携してステップファミリー研究を進め、ステップファミリーに関する一連の国際会議を明治学院大学で開催してきた（その会議の報告書は[SAJのウェブサイト](#)上に公開されている）。こうした研究や研究の成果を取り入れて、支援実践のための学びのガイドのような意味づけの本書が誕生した。ステップファミリーの親や継親が学ぶためにアメリカで開発されたビデオ教材を、日本社会に置き換えてマンガ化した教材を豊富に取り入れるなど、わかりやすさに定評がある。

3. 野沢慎司『[ネットワーク論に何ができるか－「家族・コミュニティ問題」を解く](#)』勁草書房 2009年

家族とコミュニティの接点、両者の相互関係をネットワーク論という視点から多角的に分析している。夫婦関係とネットワーク、核家族の連帯性とネットワーク、若者の結婚意欲とネットワーク、居住地移動とネットワーク、ひとりの職人の人生航路とネットワークなど、個人の意識・行動、個人間の関係がいかに関係ネットワーク現象であるかを示そうとした。

4. 野沢慎司編・監訳『[リーディングス ネットワーク論－家族・コ](#)

コミュニティ・社会関係資本』勁草書房 2006年

社会的ネットワーク論の古典から、ネットワーク分析的な社会関係資本研究の最先端まで、7つの必読論文の翻訳を収録。章末に各論文の理解を助ける解説文をつけ、この一冊で社会的ネットワーク論の半世紀にわたる展開をざっとつかめるように編集した。

5. リム・ヒュイミン著（野沢慎司訳）『お父さんお母さんへ ぼくをいやな気持ちにさせないでください 離婚した両親への手紙』

日本離婚・再婚家族と子ども研究学会 2019年

もう一点、小さな翻訳本を紹介させてほしい。シンガポール政府の社会・家族開発省（Ministry of Social and Family Development）が2017年に英語で制作・発行した絵本、*Dear Mom and Dad, Don't Make Me Feel Bad: A Child of Divorce Speaks Up* を私が日本語訳したものだ。この本のオリジナル英語版ができたばかりのときに、当時シンガポール政府職員だった友人がそれを数冊送ってくれた。それに眼を通したところ、日本の離婚した父親・母親の方々（そしてその子どもたち）にも読んでもらいたいという気持ちを抑えきれなくなった。そして、無謀にも絵本の翻訳に初めて挑戦してしまった。下記の URL あるいは QR コードから学会ウェブページにアクセスすれば、この絵本のウェブ版（PDF ファイル）を無料で読むことができる。<https://jarcds.org/hon/>

この本を翻訳した経緯について書いた「文献紹介」が、この学会の機関誌『離婚・再婚家族と子ども研究』創刊号（2019年）に掲載されているのでそれも参照してほしい。

